

調査結果を明日の授業へ！

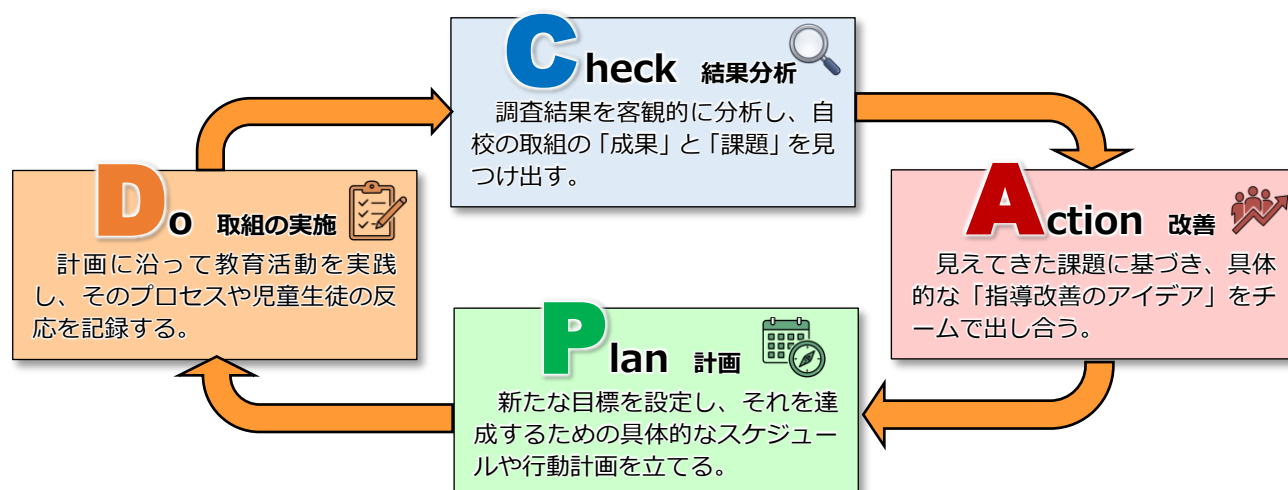
～各校の検証・改善サイクルの構築に向けて～

■ 1 「明日の授業づくり」をサポートするパンフレットに

全国学力・学習状況調査の結果を日々の授業づくりにしっかり生かせるよう、大切なポイントをまとめたパンフレットを作成し、すべての先生方にお配りします。データから見てきた「授業づくりのヒント」を共有することで、先生方がご自身の授業を振り返り、「明日の授業をこう工夫してみよう」と前向きに取り組むきっかけにしてもらうことを目的としています。

■ 2 調査結果を生かす「検証・改善サイクル」とは

全国学力・学習状況調査は、単なる結果発表ではなく、各校の取組の成果を測る1つの大きな「チェックポイント」です。以下のサイクルを意識することで、学校全体の指導力向上につながります。



検証・改善サイクルは、1年間かけてゆっくり1周させるだけではありません。学期ごと、あるいは単元ごとなど、年間を通して複数回の小さな見直しのサイクルを設けることで、より柔軟で効果的な授業改善につながります。目の前の児童生徒に合わせた最適なサイクルを、ぜひ各校で工夫してみてください。

■ 3 「学校ドック」で自校の強みと課題を見つけましょう

検証・改善サイクルを意識したとき、全国学力・学習状況調査は、学校にとっての「定期健診（学校ドック）」と言えるでしょう。「うちの児童生徒はここが育っているな」「この単元は少しつまずきやすいかもしれない」といった、普段の指導で気になっていることの根拠を探るために、ぜひ前向きにご活用ください。その際、国から届く「各学校の結果データ」に加えて、香川県教育センターが作成した「活用ツール」を併せてお使いいただくのが効果的です。全国、香川県、自校の状況を比較することで、自校の強みや改善点がより明確になります。

■ 4 「活用ツール」で自校のデータを check !

香川県教育センターが提供している活用ツール(Excelファイル)を使えば、全国と香川県の状況に加え、**自校の状況をグラフや表に表示、経年比較したり、作成されたグラフ等ファイル内の表を貼り付けて活用したり**することができます。

① 活用ツールのダウンロード

香川県教育センターWebサイトから活用ツール（Excelファイル）と使用説明（PDFファイル）をダウンロードします。（認証領域にログインが必要です。）

② 自校のデータの用意

文部科学省指定のWebシステムからダウンロードした調査結果の電子データをコンピュータのデスクトップに展開します。（別途文部科学省から送付されているはがきのパスワードが必要です。）

③ 活用ツールの起動

必要なファイル名を選び、ボタンを押すと、データを読み込むことができます。

提供されたデータから表やグラフを作成

4. 活用ツールの操作
(1) 各シートへのリンク

① 目次（項目をクリックしてください）

メニューシート

クリックすれば目的のシートを表示できます。

目的に応じたシートを選択し、データを可視化しましょう。

自校の取組に照らして結果を分析

問題別調査結果

調査結果から課題を把握
国語の「読むこと」に課題がありそうだね。

どのような「つまずき」があったのだろう？

質問調査結果

取組の成果を確認
「学校が楽しい」と実感している割合が増えているね。

どのような取組が成果につながったのだろう？

※ 児童生徒質問調査については、質問項目ごとに、回答状況を示す帯グラフ、経年変化を示す折れ線グラフが表示されます。

活用ツールで可視化されたデータを用いて、校内研修の場が充実することを願っています。ぜひ、ご活用ください。

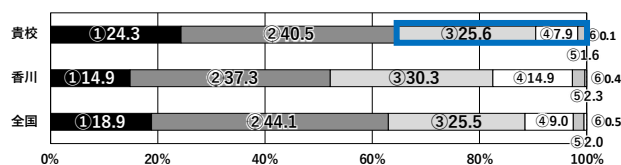


■5 カリキュラム・マネジメントの充実へ

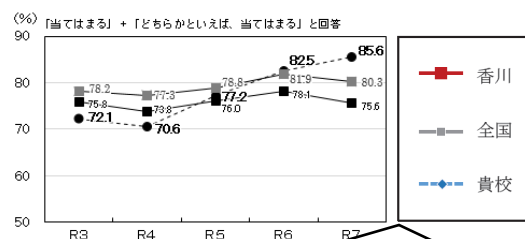
分析を行う際は、次のような観点から学校や児童生徒の状況を見つめ直し、組織的かつ計画的な教育活動の質の向上（カリキュラム・マネジメントの充実）につなげていくことが大切です。

○ 視覚的に捉える

調査結果データを目的に応じたグラフ（帯グラフや折れ線グラフ等）を用いて可視化し、児童生徒の意識の変容や実態を捉えましょう。



帯グラフで表すことで、本年度の児童生徒の回答状況を、より詳しく捉えることができます。特に、否定的な回答をした児童生徒に着目し、その理由を分析・考察することが改善につながります。



折れ線グラフで表すことで、経年で児童生徒の変容を捉えることができます。対象となる児童生徒は違いますが、学校全体で取り組んでいることの傾向を捉えることができます。

○ 関連性を探る

可視化したデータを用いて、各学校の取組（現職教育のテーマ等）と、児童生徒の意識の変化や教科に関する調査結果との関連について協議し、成果や課題を分析しましょう。

（例）

現職教育テーマの「主体的に学ぶ子どもの育成」に、関連する質問項目はどれだろうか？

どのような取組が成果につながったのだろうか？



児童生徒質問調査だけでなく、学校質問調査の項目も分析してみよう。

教科の調査では、どの調査問題が「読解力の育成」に関わっているのだろうか？

○ サイクルを回す

育成したい力を具体化し、改善策を考えましょう。そして、自校の年間計画等と照らして検証・改善サイクルを構築しましょう。



調査結果の活用や調査結果を基にした取組等、各学校で困っていることがありましたら、香川県教育センターの「研究相談」や「研修サポート」をご利用ください。

「主体的・対話的で深い学び」の実装に向けて

香川県教育委員会では、全ての子どもにこれからの社会で求められる資質・能力を育成することを目指しています。そのために、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」をより一層具現化・深化させる実装の段階へと歩みを進めています。

その上で、昨年度（令和7年度）の全国学力・学習状況調査の結果を踏まえ、下のような「何ができるようになるか」「どのように学ぶか」の2つの視点から授業改善を呼びかけています。

「何ができるようになるか」の視点

教科に関する調査の課題に対する授業改善

課題Ⅰ 資料に書かれている文や図が示している意図は何かを考え、解釈して表現する

授業すべきことⅠ
 資料や友達の発言の意図などについて、自分の言葉で説明する時間をとる

課題Ⅱ 知識・技能を様々な問題場面に生きて働くものとして習得する

授業すべきことⅡ
 知識・技能を活用する場面を授業や生活場面に意図的に位置付ける



「どのように学ぶか」の視点

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向けた授業改善

「個別最適な学び」の成果を「協働的な学び」に生かし、更にその成果を「個別最適な学び」に還元するなど、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実していくことが大切です。

「個別最適な学び」

↻

「協働的な学び」



授業改善の視点

学習環境
 子どもが、自ら学習を調整しながら学ぶことができるよう、ICTを活用するなど学習環境を工夫する。

学びがいのある課題設定
 知的好奇心を喚起し、主体的に考える姿勢を育むことができるよう、子どもにとって学びがいのある課題となるよう工夫する。

自己選択・自己決定
 個々の子どもにとって最適な学びとなるよう、学習教材や問題、解決方法、学習形態など、多様な自己選択・自己決定の場を工夫する。

学びの過程の振り返り
 子どもが、自身の伸びを実感したり、見通しをもったりできるよう、振り返りの目的を確認したり、振り返りの内容やタイミングを工夫したりする。



※ 「令和8年度 学校教育実践の手引」より引用

特集1では、これらの授業改善の視点から児童生徒質問調査および学校質問調査の結果を分析し、取組の成果と、さらなる充実に向けた提言をまとめました。

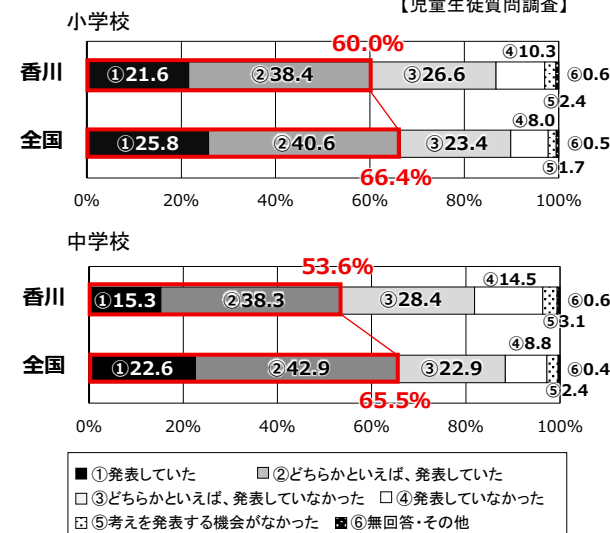
各校における取組の振り返りや、明日からの授業改善のヒントとしてご活用ください。

「何ができるようになるか」の視点で調査結果を振り返る

● 自分の言葉で伝えたり、まとめたりする機会を意識して位置付ける

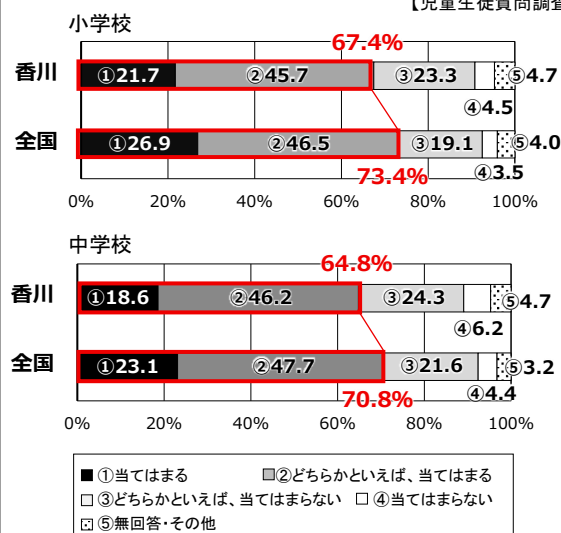
□38 5年生まで(1、2年生のとき)に受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか

【児童生徒質問調査】



□40 5年生まで(1、2年生のとき)に受けた授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていましたか

【児童生徒質問調査】



調査結果から、本県の子どもたちは「□38 自分の考えを工夫して伝えること」や「□40 学んだことを生かして自分の考えをまとめること」に、全国と比べてまだ力を伸ばせる可能性があることが見えてきました。

「この資料を使って考えの理由を教えて」「このグラフから何が言えるかな？」などと声をかけ、資料や文章を読み解き、相手に伝わるように話の組み立てを工夫して発表する経験をつくること、**課題Ⅰ**の解釈し、表現する力の育成につながります。

また、「これまでに習った考え方で使えるようなものはないかな？」と問いかけ、問題解決に向けて、学んだ知識を生かし、自分なりの考えをまとめる活動を仕組むことが、**課題Ⅱ**の生きて働く知識・技能の習得につながります。

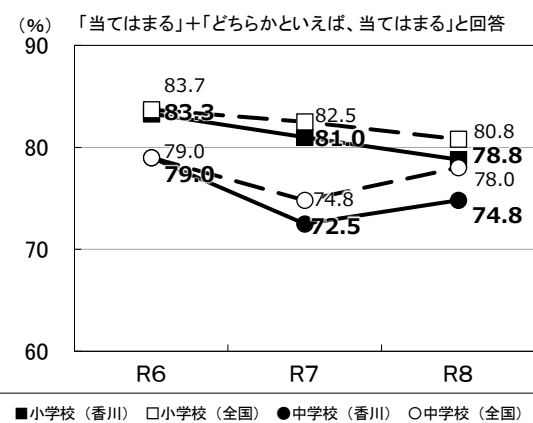
目の前の子どもたちの実態に合わせ、日々の授業の中で、こうした問いかけを取り入れることから始めてみませんか。

※課題Ⅰ、課題Ⅱ P4参照

● 「分かる」から「使える」へ！ 学びと日常をつなぐ授業づくり

□44 授業で学んだことを、次の学習や実生活に結びつけて考えたり、生かしたりすることができますか

【児童生徒質問調査】



7割を超える子どもたちが「□44 授業で学んだことを、次の学習や生活に生かせる」と肯定的に捉えており、日々の先生方の指導の成果が表れています。

一方で、経年変化に目を向けると、小学校では肯定的な回答が減少傾向にあり、中学校では全国との差が開きつつあります。

知識を実生活で使える力へ引き上げるには、「下級生への発表(国語)」や「遠足の買い物計画(算数)」など、身近な課題を設定し、学ぶ必然性をもたせることが重要です。単元全体で学習をデザインし、「学んだ考え方をを使うと●●できた」と、日常とのつながりを実感できるようにすることで、知識は生きて働く力へと変わります。

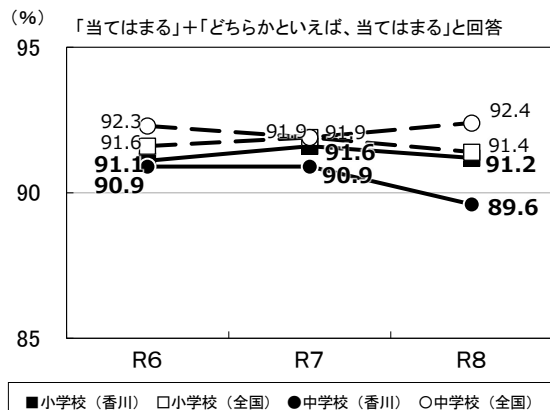
「どのように学ぶか」の視点で調査結果を振り返る

学習環境

違いを認めて協力し合える安心・安全な風土づくりを

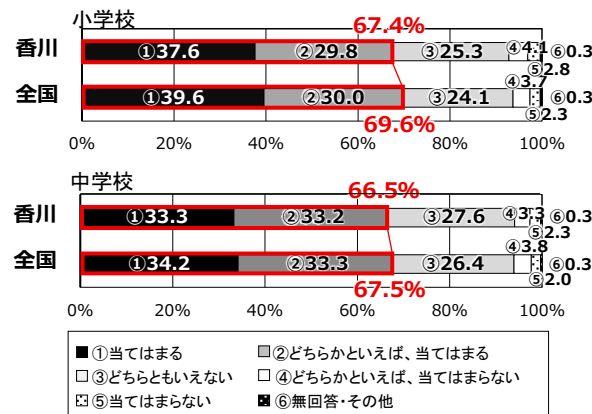
□46 授業や学校生活では、友達や周りの人の考えを大切に
して、お互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいますか

【児童生徒質問調査】



□20 あなたの学級では、人と違う意見を言っても否定されないと
思いますか

【児童生徒質問調査】



約9割の子どもたちが「□46 互いに協力しながら課題解決に取り組んでいる」と肯定的に回答しており、日々の先生方のご指導によって本県の強みとなっていると言えます。一方で、「□20 人と違う意見を言っても否定されない」と感じる子どもは、小・中学校ともに6割台にとどまっています。

「主体的・対話的で深い学び」を実現するには、心理的に安心・安全な学習環境の整備が不可欠です。まずは、間違いや多様な考えを認め合う学級風土づくりから始めませんか。

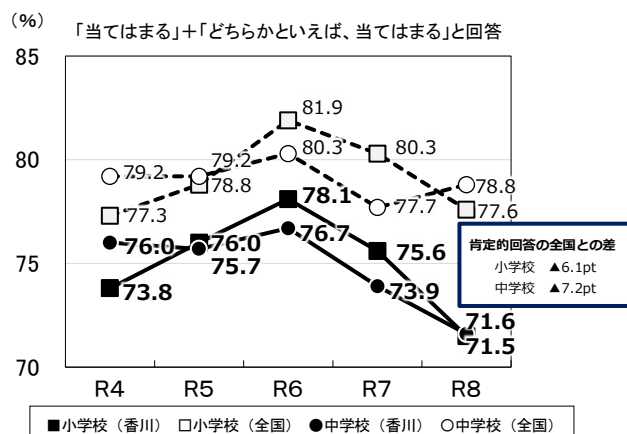
「そういう見方もあるんだ。おもしろいね」「●●さんが疑問を言ってくれたから、みんなの学びが深まったね」といった先生方の日々の温かい声かけが、子どもたちが安心して自己表現し、互いの違いを生かしながら学び合える土台となります。

学びがいのある学習課題 学びの過程の振り返り

振り返りを生かした自分事の学習課題を

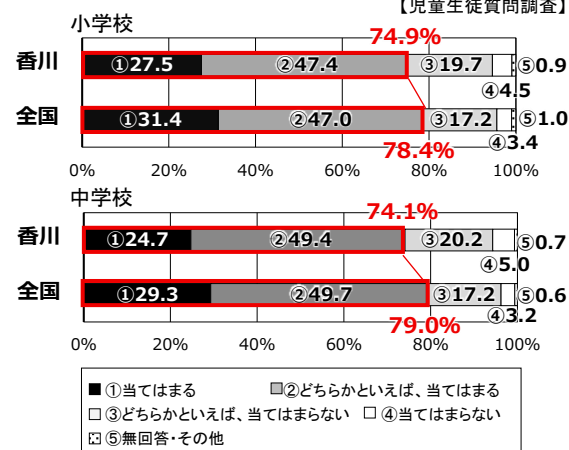
□39 5年生まで（1、2年生のとき）に受けた授業では、課題の
解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか

【児童生徒質問調査】



□43 学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった
点を見直し、次の学習につなげることができていますか

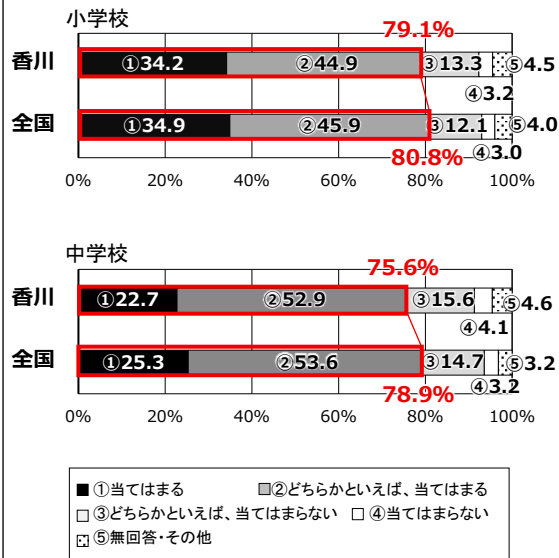
【児童生徒質問調査】



調査結果から、「□39 自ら課題に取り組む姿勢」や「□43 振り返りを次の学習に生かす力」に課題があり、主体的な取組は減少傾向にあります。

学びを自分事するには、日々の振り返りの工夫が鍵を握ります。授業の終末に「次はどんなことを知りたいか」「どう生かしたいか」と問いかけ、その振り返りを次の課題設定に生かしてみませんか。自身の疑問や思いが次への見通しにつながる経験が、主体的な学びを引き出します。

□41 5年生まで(1、2年生のとき)に受けた授業は、自分にあった教え方、教材、学習時間などになっていましたか
【児童生徒質問調査】



小・中学校ともに約8割の子どもたちが肯定的な回答をしており、多くの授業で自己選択・自己決定できるよう配慮がなされていることがうかがえます。しかし、依然として全国平均を下回っているのが現状です。

学力向上モデル校の実践に学ぶ

自分に合った学び方を選ぶ環境をデザインする工夫として、学力向上モデル校(中学校外国語科)の実践を紹介します。

授業冒頭の暗唱の帯活動では、生徒自身が制限時間内にどこまで挑戦するかという目標を決めて取り組みます。自分の力に合わせて取り組み方を選択することで、主体的に学習へ向かうことができていました。

また、ALTに日本語を伝える協働学習の場面では、全体で共有された複数の改善方法(ジェスチャーを交える等)の中から、生徒自身が自分たちの班にふさわしい手段を選び、練習方法を工夫していました。

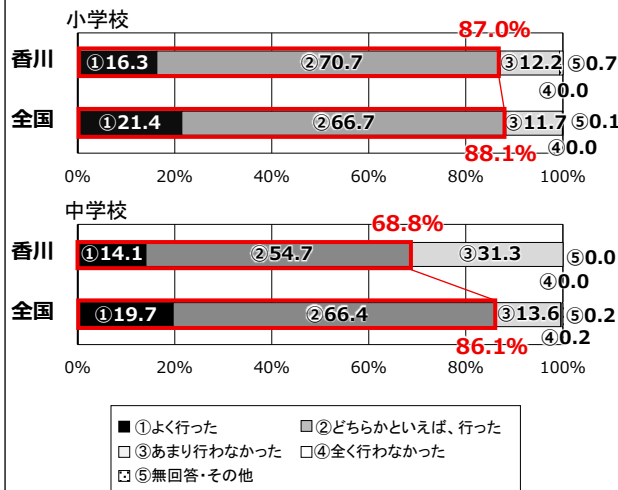
こうした授業内の小さな選択と決定の積み重ねが、自分に合った学びを見つける力を育むことへとつながります。



● 点と点の知識をつなぎ、問題解決に生かす授業づくりを

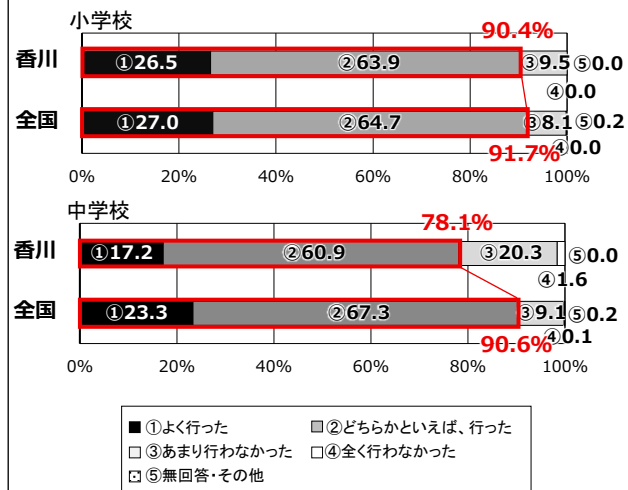
■34 調査対象学年の児童(生徒)に対して、前年度までに、習得・活用及び探究の学習過程を見通した指導方法の改善及び工夫をしましたか

【学校質問調査】



■35 調査対象学年の児童(生徒)に対して、前年度までに、関連する既習事項を振り返り、知識を総合的に関連付ける学習活動を行いましたか

【学校質問調査】



学校質問調査から、活用を意識した授業づくりの課題が見えてきました。特に中学校において、「■34 学習過程を見通した指導」や「■35 既習事項を関連付ける学習活動」を実施している割合が、全国を大きく下回っています。

生きて働く知識・技能は、これまでに学んだことを活用した主体的な問題解決の中で育まれます。例えば、授業の振り返りにおいて、「前に習った●●という考え方で解決できた」「これも同じだね」と、知識と知識を関連付ける経験の積み重ねが、自ら学びに向かう力を育みます。

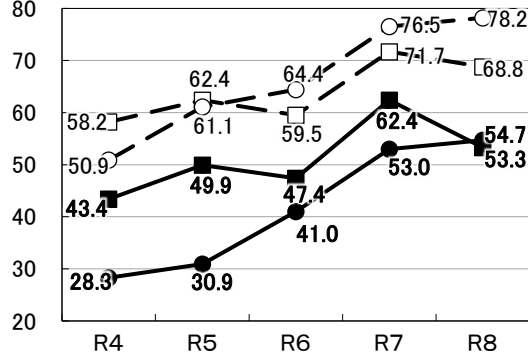
日々の教材研究の中で、「習得と活用のサイクル」を意識し、子どもたちが既習事項を生かして問題解決に向かえる授業をデザインしていきましょう。子ども任せの放任ではなく、専門職としての教師による意図的な働きかけこそが、生きて働く知識・技能の定着につながります。

子ども主体の ICT 活用に向けて

● ICT活用は「量」から「質」へ

□35 5年生までに(1、2年生のとき)に受けた授業で、PC・タブレットなどの ICT 機器を、どの程度使用しましたか
【児童生徒質問調査】

(%) 「ほぼ毎日」+「週3日以上」と回答



■小学校(香川) □小学校(全国) ●中学校(香川) ○中学校(全国)

教科の正答率とのクロス集計結果(使用頻度)

小学校

質問 番号	質問事項	選択肢	当該選択肢を選んだ児童の平均正答率(%)	
			国語	算数
35	5年生までに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか	① ほぼ毎日(1日に複数の授業で活用)	60.0	53.4
		② ほぼ毎日(1日に1回以上の授業で活用)	61.2	54.5
		③ 週3回以上	60.5	54.6
		④ 週1回以上	60.9	55.1
		⑤ 月1回以上	61.3	53.9
		⑥ 月1回未満	52.3	45.8
		差①-⑥	7.7	7.6

中学校

質問 番号	質問事項	選択肢	前年度選択肢を選んだ生徒の平均正答率・平均IRTスコア			
			国語	数学	英語	
35	1、2年生のときに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか	① ほぼ毎日(1日に複数の授業で活用)		62.9	58.1	486
		② ほぼ毎日(1日に1回以上の授業で活用)		63.6	58.3	490
		③ 週3回以上		63.0	58.2	490
		④ 週1回以上		62.2	56.6	486
		⑤ 月1回以上		62.4	57.1	485
		⑥ 月1回未満		55.8	49.8	463
		差①-⑥	7.1	8.3	23	

「□35 ICT機器の使用頻度」を見ると、中学校では年々上昇しているものの、全国との差は依然として大きく(全国比-23.5pt)、小学校では前年度から使用頻度が大きく低下しています。

さらに教科の正答率との関係に目を向けると、本県では、「月1回未満」の層を除けば、使用頻度と学力(正答率)の間に大きな差は見られませんでした。

今後は頻度だけでなく、「子どもの思考をどう深めるか」という活用の質をアップデートすることが求められます。次期学習指導要領を見据えても、ICT機器を自らの学びを調整し探究するためのツールとして、主体的に使いこなす力がますます重要になります。

● 目的意識が学力を向上させる!子どもが自ら選び、使いこなすICT活用

教科の正答率とのクロス集計結果(活用スキル)

質問番号	質問事項	選択肢	当該選択肢を選んだ児童の平均正答率(%)		当該選択肢を選んだ生徒の平均正答率・平均IRTスコア		
			国語	算数	国語	数学	英語
36-1	あなたは自分がPC・タブレットなどのICT機器で文章を作成する(文字、コメントを書くなど)ことができますか	① そう思う	66.8	60.7	67.4	63.3	515
		② どちらかといえば、そう思う	58.6	51.5	62.6	57.2	482
		③ どちらかといえば、そう思わない	53.0	45.5	54.7	46.8	447
		④ そう思わない	44.2	38.6	48.0	39.9	422
		差①-④	22.6	22.1	19.4	23.4	93
36-2	あなたは自分がインターネットを使って情報を収集する(検索する、調べるなど)ことができますか	① そう思う	64.7	58.2	65.6	60.8	502
		② どちらかといえば、そう思う	56.5	49.8	60.5	54.8	476
		③ どちらかといえば、そう思わない	50.8	43.6	51.5	44.0	441
		④ そう思わない	44.0	36.7	45.7	37.7	411
		差①-④	20.7	21.5	19.9	23.1	91
36-3	あなたは自分がPC・タブレットなどのICT機器を使って情報を整理する(図、表、グラフ、思考ツールなどを使ってまとめる)ことができますか	① そう思う	66.9	60.7	65.4	61.5	504
		② どちらかといえば、そう思う	60.9	54.6	64.8	60.5	497
		③ どちらかといえば、そう思わない	56.3	49.2	60.3	53.3	474
		④ そう思わない	48.9	41.2	55.6	47.3	453
		差①-④	18.0	19.5	9.8	14.2	51
36-4	あなたは自分がPC・タブレットなどのICT機器を使って学校での活動でプレゼンテーション(発表のスライド)を作成することができますか	① そう思う	67.4	60.7	67.6	63.9	515
		② どちらかといえば、そう思う	60.0	53.7	63.9	59.0	494
		③ どちらかといえば、そう思わない	54.1	47.5	57.2	50.1	456
		④ そう思わない	48.7	41.3	51.8	42.4	434
		差①-④	18.7	19.4	15.8	21.5	81

表を見ると、ICT機器を使って「文章を作成する」「情報を収集・整理する」「発表のスライドを作成する」ことができると肯定的に回答した児童生徒ほど、小・中学校の全教科において平均正答率が高いという明確な傾向が読み取れます。

この結果は、ICT機器を単に受け身で使うだけでなく、自分の思考を深め、他者に表現するための手段として使いこなすスキルが、学力の向上に関係していることを示しています。

「何のために使うのか」という目的を明確にし、子どもたちが自らツールを選択して主体的に活用できる場面を、日々の授業に意図的に仕組んでいくことが大切です。

● ICTで自らの学びをデザイン！生徒が主役になる授業

学力向上モデル校の実践に学ぶ

学力向上モデル校、中学校数学の実践を紹介します。生徒が目的をもって ICT を活用し、自らの学びを主体的にデザインする授業です。

導入では、前時の振り返りを共有し、「平方根の計算で、 $\sqrt{\quad}$ の中が大きな数のときはどうすれば簡単に解けるか」という生徒自身の疑問から課題を設定しました。

課題解決の場面では、端末上にクラス全体の「学習進度表」を共有します。生徒自身が「完了」「取組中」「help」といった現在の状況を入力することで、同じ課題に取り組む仲間や、サポートを必要としている友達をリアルタイムで把握できます。生徒は、クラウド上にある多様な問題から取り組む内容を自己決定しつつ、進度表を見て誰と、どのように学ぶかを自ら計画し、調整していました。

このような学習環境は、生徒の主体的な学びを引き出します。友達「help」を見て支援に回り、「そういうときは素因数分解をすればいいよ」などと対話を通じて思考プロセスを共有したり、その後に AI ドリルで自分の理解度を確認めたりする姿が見られました。

生徒の思いを実現できる学習環境を工夫することで、主体的な学びと ICT の効果的な活用を実現した実践と言えるでしょう。



● 「探究×ICT」の相乗効果！目的をもった活用が学力の向上につながる

教科の正答率とのクロス集計結果（総合的な学習の時間）

質問番号	質問事項	選択肢	当該選択肢を選んだ児童の平均正答率(%)		当該選択肢を選んだ生徒の平均正答率・平均IRTスコア		
			国語	算数	国語	数学	英語
47	総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理し、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか	① 当てはまる	65.9	59.9	66.7	63.5	511
		② どちらかといえば、当てはまる	60.0	53.8	63.5	58.7	491
		③ どちらかといえば、当てはまらない	56.0	48.8	59.1	52.2	469
		④ 当てはまらない	50.2	44.0	52.9	43.2	441
		差①-④	15.7	15.9	13.8	20.3	70.0
48	総合的な学習の時間では、PC・タブレットなどのICT機器を使って、うまく情報を集めたり、整理したり、発表したりできていますか	① 当てはまる	66.8	60.7	67.4	64.5	514
		② どちらかといえば、当てはまる	60.0	54.6	64.0	59.3	494
		③ どちらかといえば、当てはまらない	54.5	46.3	57.8	50.6	462
		④ 当てはまらない	47.2	40.2	52.9	43.0	438
		差①-④	19.6	20.5	14.5	21.5	76.0

総合的な学習の時間で、自分で課題を見つけて探究する子どもほど、各教科の正答率が高い傾向にあります。さらに注目したいのは、「情報を集める・まとめる・発表する」場面で、ICT を効果的に使っていると感じる子どもほど、その傾向がより強いという点です。

つまり、「何のために使うのか」という目的意識をもち、ICT 機器を考えを深めたり伝えたりする「手段」として使いこなす経験が、正答率アップにつながる可能性があります。

まずは学校や地域の題材を生かし、子どもが夢中で探究に向かう授業をデザインしてみませんか。そしてそのプロセスの中に、目的をもった ICT 活用を位置付けていくことが重要です。

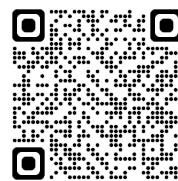
Column これからの時代に必要な「情報活用能力」とは？

次期学習指導要領に向けて、情報活用能力をより一層高めていく方向性が示されています。今後は、小学校の総合的な学習の時間に「情報の領域」が、中学校に「情報・技術科」が新設される予定です。これまで課題となっていた小・中・高の系統性や、生成 AI などの最新技術への対応を見直し、これからは①情報を集め発信する「活用」、②情報モラルを守る「適切な取扱い」、③仕組みを正しく知る「特性の理解」といった3つの力を一体として育てていくことが求められます。

この「情報活用能力」は、すべての教科の学びを支える土台になります。子どもたちが ICT を自在に使いこなせるよう、少しずつ学びの環境をアップデートしていきましょう。

文部科学省「StuDX Style（スタディーエックス スタイル）」

GIGA スクール構想に基づく「1人1台端末」の具体的な活用方法や、各教科・総合的な学習の時間での ICT を手段として活用する全国の優良な実践事例が豊富に集められた特設サイトです。先生方への具体的な紹介に大変役立ちます。



<https://www.mext.go.jp/studxstyle/>